

広報委員会 2015.03.20

シリーズ「エスペラントの今」 No. 2

エスペラントの現状を様々な面からご紹介するシリーズの第2回目をお届けいたします。ご質問、取材問い合わせ等は、当協会広報委員会までお願いします。

■外国語学習におけるエスペラントの予備教育的価値について

外国語の学習において、その目的とする外国語の学習を始める前段階でエスペラントを「踏み台」(Springboard)として学んだ子どもたちは、同じ期間の学習でその目的とする外国語がよりうまくなる(成績が向上する)という結果が各種の教育実験・研究から明らかになっています。

1920年代から60年代にかけて、アメリカ、イギリス、フィンランド等で、母語以外の外国語、たとえばフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、英語、ロシア語を始める前にエスペラントを学習することで、この学習をしなかった子どもたちより良い結果を得たという報告がありました。1970年代には、ドイツのパデルボーンで同様の教育実験をより大がかりに行い、先に2年間エスペラントを学習したグループは、しなかったグループより30%も成績が良いという結果が出ました。このような実験は、1990年代にもドイツ、スロベニア、イタリアなどでも行われ、同様の結果を生んでいます。

そのような実験が、中国でも2008年から継続中です。山西省太原市の柏揚樹街小学校では、小学校1年生4クラスのうち、1クラスはエスペラントを、他の3クラスは英語を学び始め、3年生になるとエスペラントを学んだ児童たちも英語を始め、エスペラントも継続して学びます。(中国では小学校1年から英語が正式科目となっています。)週に2回、50分授業で、4年生が終わる時点での英語の成績が次の表です。(★がエスペラントクラス)

クラス	人数	90点超の児童の割合	平均点
1 (★)	64	92.1%	97.0
2	63	70.3%	91.9
3	63	62.9%	89.2
4	63	79.4%	93.6

欧米の言語とは異なる中国語を母語とする場合にも、同様な結果が得られていることが注目され

ます。ヨーロッパでの実験でも中国の実験でも、さらに次のような教育的効果も得られています。

- ▶ エスペラントを学んだ子どもたちは、国語、数学、地理などの教科でもエスペラントを学んでいない子どもたちよりも成績が良い。
- ▶ 学習についていけない子どもたちが少なく、エスペラントならわかるという喜びが得られる。
- ▶ 目的とした外国語がわからなくても、エスペラントがわかれば国際的なコミュニケーションに困ることはなく、エスペラントの世界という、より多様で深い人間関係を築くことが可能である。

外国語学習でエスペラントが持つ予備教育的価値とは、言語としてのエスペラントの特徴によります。語彙はもちろんのこと、名詞や形容詞、動詞などの品詞の区別、修飾語と被修飾語との関係などを理解し、印欧語の基本的な骨組がわかるためのモデル言語のようなものと言われています。例外のない、規則的なエスペラントを「踏み台」にすることで、次の言語を学ぶ方が効果的であるということです。

2013年、文部科学省は小学校3年生から外国語（英語）教育を始め、5、6年生で英語を正式の必修科目とする方針を公表し、2020年までの実施を目指すとしています。繰り返される英語教育改革がどのような効果をあげたのかの検証はされず、日本人の英語力の低さは相変らずとされています。3月17日の朝日新聞夕刊によれば、高校3年生の英語力を国が統一して測る初のテストで、

7～8割が高校卒業時の目標とされる「英検準2級～2級程度」に達していないということです。

東京都は、2020年のオリンピック・パラリンピック開催を見据え、グローバル人材育成のための教育施策の中に多言語教育の取り組みをあげ、英語以外の外国語の学習・活動の設置・拡大を決めました。英語一辺倒から、少しずつながらも変化が起きているようです。

このような状況の中、日本でもエスペラントの予備教育的価値に目が向けられることが期待されます。